

横山興業株式会社

「日本で製造業を続けることの危機感が生んだ新たな挑戦！」

～従来分野における技術革新(新工法の確立)と、新規分野への挑戦(カクテルシェーカーの開発)～

PROFILE

- ◆本社所在地：豊田市千石町1-11-1
- ◆設立：1956年12月
- ◆代表者：横山 真久
- ◆資本金：4000万円
- ◆従業員：195名
- ◆事業内容：自動車事業（自動車シート向け製品の金属プレス加工・溶接加工）、建材事業、太陽光発電事業、金属製品事業
- ◆電話：0565-88-7010
- ◆http://www.yokoyama-co.com

自動車向けのシートの金属プレス加工・溶接加工等が、売上約7割を占める横山興業㈱。リーマンショックの影響はそれほど受けなかったものの、部品が使用される車種の変更等の影響で、国内生産の売上は減少し、厳しい状況にある。そんな同社の新たな取組が、今、注目を集めている。

それが、金属プレス技術における独自の新工法「SFP工法」の確立と、自動車とは別の分野への挑戦としての「カクテルシェーカー」の開発。

新たな取組のきっかけとなったのは、海外(タイ)へ進出する際に感じた危機感。専務取締役の横山栄介氏は、日本の技術者が数年指導すれば、現地で同じ製品が出来る現実を目の当たりにした時、取引先からの図面で加工・製造をしている従来のスタイルだけでは、いつか会社自体が立ち行かなくなる日がくることを、現実のものとして重く受け止めた。



【独自の技術を — 新工法(SFP工法)の確立へ】

大企業の下請けでも全国から必要とされる企業であること。そのためには、自社でなければならない技術を持つことが必要だ。「何かないか・・・」、各地の展示会を巡る中、とある展示会で偶然、ある職人の技術に目が留まった。この技術を自社製品に応用し量産化することができないか。技術の権利を取得し、理論の研究と、試作、改良を繰り返した結果、約2年の歳月を得て「SFP工法」を確立することに成功した。一般のプレス機では、従来、不可能であった「厚板を高精度・高面粗度で打ち抜き加工」ことを可能にした画期的な工法で、切削工法からの代替、リードタイム短縮や品質向上など、顧客ニーズに合わせた提案が可能となった。

【独自の技術を持つことの意味】

「SFP工法」の確立は、会社の技術力を格段に向上させるとともに、これまでの営業スタイルを一変させた。見学会や公開トライを企画したり、従来の取引先に対し、積極的な提案ができるようになった。

また、展示会のブースに人が足を止めてくれるようになり、今まで全く関係のなかった企業との繋がりも生まれている。先日(2014年10月)、初めてのSFP工法による製品を新たな取引先に出荷した。技術の売り込みは、まだ試行錯誤であるが、全国から数多くの問い合わせがあり、確かな手ごたえを感じている。また、数年後、進出先のタイに技術を持って行き、確実な優位性を築くことを目標としている。



同社のもう一つの新たな取組が、独自の製品「カクテルシェーカー<BIRDY.>」の開発。自動車部品メーカーという全くの異業種からの参入であり、これまでの道具とは全く異なる味わいに仕上がる画期的な製品として、国内外のバー業界で話題となっている。

【なぜ、カクテルシェーカーなのか?】

開発を主に手がけたのは、東京でウェブデザイナーとして働いていた経験を持つ商品企画室長の横山哲也氏。専務で兄の栄介氏とともに、新商品開発のプロジェクトを立ち上げた。

開発部門を持たない中小企業にとっては、いかに規定の製品を安く・早く作るかという「工程」が仕事の中心で、そもそも「何を」作るかという「モノ」を考へることがない。

独自の製品開発は、その「モノ」を考へる所から始まった。稼業が金属加工を業とすることから、金属をテーマに、SFP工法の開発で培った磨きの技術を応用できる「モノ」にしたい。「カクテルシェーカー」に着目したのは、哲也氏がよく休日にバーに通っていたことがきっかけではあるが、「自動車とカクテル」という一見ミスマッチな取り合わせが目を引きのけと直感した。海外でカクテルブームが再燃していること、また日本のパーツの需要が海外で高まりつつあるとのリサーチ結果が、立ち上げを後押しした。

【成功のポイント】

同社の取組の特徴は、「企画」、「製造」、「販売」の全てを自社だけでやることに固執していないこと。プロセスをイメージして、自分達の強みを活かせる場所を見つける。シェーカーの素材となるステンレスの加工は、それを得意とするパートナー企業を探して任せることで、開発のスピードを上げ、開発コストの削減に繋がった。「スピード感を持った開発。本体事業に影響を与えない開発。」が合言葉。ブランドロゴのデザインも若手の工業デザインを手がけるクリエイターを活用した。

同社が担当するのは、このシェーカーの命である独自技術を活かした内側の磨き。異分野から参入するのであれば、その業界に革命を起こすようなインパクトを与える商品を作りたい。そのため、磨きにとことんこだわり、単にツルツルに磨くのではなく、0.1ミクロン単位の調節を繰り返し、カクテルが混ざり合うのに最適な凹凸を残すとともに、シェーカーの構造まで論理的に考へ、従来製品とは一線を画す斬新なフォルムに設計した。試作品を抱え、兄弟手分けして飛び込みで全国各地のバーに行けば、バーテンダーの意見を聞き、試行錯誤を繰り返した。その結果、わずか1年足らずでカクテルシェーカー<BIRDY.>は誕生し、バー業界に大きなインパクトをもたらす、マスメディアも注目する製品となった。今後は、バーの文化が根付く海外を中心に販売を展開し、3年後には、売上2億円を目指している。

